

幕末明治の写真師列伝 第二百二十三回 宮下欽 その四十一

「五月同五日 晴天

一、午前第十二時過西丸御焼失、○同第五時過和泉橋之大病院之内一陣焼失ス、其節宮下・与三郎火事場へ行、与三郎無程帰ル、宮下夫と医師へ行、同第七時頃帰ル、○同第七時過明神下石坂氏（註1）之写真、過日写取候分何枚入用哉之旨[宮下]聞ニ行候所、石坂氏留主ニ付不知候故、無程帰ル、○午後第六時過帰ル、右同人入船町五丁目飯野屋ニ寄宿之旨、○竹造・たか夜ニ入茅町へ行、竹造無程帰り、たか明[早]朝帰り可申旨相頼、○午後第三時頃浅沼や（註：屋）手代来リ、無程帰ル、

（註1：石坂氏とは、神田明神男坂下に住む石坂周造のこと。石坂周造は幕医石坂宗哲の次男で、山岡鉄舟の義弟。明治時代の石油採掘業の先駆者。）

「五月同八日 晴天

一、第七時頃宮下、天神下石坂氏へ四ツ立写真[六枚]持参ス、然ル所、石坂氏一寸外出致し候旨ニ付待居候所、一時間余り面会致し候所、ハツ立判の方も六枚持参候旨頼ニ付承知致し、同第九時頃帰ル、○大山・斎藤・武助同第八時頃私用ニ而外出ス、○与三郎同第十一時頃、事務局へ行、兼而蜷川氏と註文之上方四ツ立判九枚持参ス、其節上方四ツ立判（註：一文字分空き）号三枚註文有之、夫と帰り私用を弁シ、午後第四時半頃帰ル、○松藏正午過紀[の]国屋へ行、菓子一折為土産持参ス、同店之世話ニ而江州へ送り候双眼反对取、五拾枚入一組、右代金之内三拾両去年受取、残金と四月九日ニ遣候、夫と浅草町新田氏へ行、為土産菓子一折持参シ、同第五時十分帰ル、○斎藤午後第六時頃帰ル、○同第五時半頃老子氏御出、茶出ス茶・夕飯出ス、同第六時半頃御帰り、○午後第三時頃、箱館大山源三郎殿方先生御名面ニ而郵便来ル、開封致し候所[御同状外ニ]中封有之、弥三郎江之来状なり、○先生中清（註2）へ遣置候双眼反对五拾枚入之写真、外ニ買人有之候へ共、所不相分候間相認候旨、相頼写真持参シ置帰ル、

（註2：中清は、写真材料商の中田清次郎のこと。）

「五月同九日 晴

一、第八時斎藤無抛用事ニ而実父藏人殿方迄参リ、午後第七時半頃帰ル、○第十時頃大惣来ル、松五郎殿方被頼候アルコール一本持参シ、払之催促致し候へ共、不都合ニ付今少し相待候様申候所、先方ニ而ハ甚不都合ニ付、写真絵ニ而も宜候間、少しも早く払候旨相頼む、昼飯出ス、午後第二時頃帰ル、○○（註：まま）第九時頃中清手代来ル、昼飯出ス、反对取之所書、五拾枚致し遣ス、品物持参シ午後第一時頃帰ル、○午後第一時頃館へ箱高田篤造殿来ル、菓子・茶出ス、紙取写真致し遣ス、同二時過帰ル、○岩吉塗物直し之分、通帳二有之候通仕上持参ス、○午後第五時過宮下[浅草]内田氏へ見舞ニ行、同第七時頃帰ル、（註3）○斎藤昨日方如何敷所業有之候ニ付、其段□（門生）一同ニ而当人へ承り候所、申訳無之旨申候ニ付、先生御留主之義ニ有之候間、寄留之義ハ相断候所、達而詫候へ共門生一同不承知ニ付、同第九時半頃小石川御掃除町十八番地南間孫一郎殿方へ参り武助参り、右同人即刻引渡ス、尤[斎藤持参致し置候]品物ハ預り置、同第十二時前帰ル、○第十時頃おさき来ル、餅菓子一持参ス、夜泊ス、

（註3：この頃、すでに内田九一が肺病で具合が悪いことがこの日の記述から読み取れる）

「五月同十一日 雨午後ニ至晴

一、第七時前玉松おしゆ（主）来リ、無抛入用之義出来候間、建家弘代遣し、残り之内半金来ル十四日迄ニ繰合候様相頼帰ル、○午後第二時頃浅沼や（屋）来ル、近日横浜へコロジョン売ニ行候間、品物之代金呉候旨頼候へ共不都合ニ付相断、同第三時前帰ル、○同第三時過亀井氏（註：横山松三郎の弟子・亀井至一のこと）来ル、同第四時頃同氏弟（註：亀井竹次郎のこ

と）来ル、同第五時過帰ル、右兩人へ菓子・茶出ス、○宮下眼病今以全快不到候ニ付、同第三時過医師へ行、夫と石坂氏方へ兼而註文之ハツ立判写真五枚持参シ、[先日之分と相合せ]代金九兩二朱受取ル、同第五時頃帰ル、

「五月同十二日 晴

一、第七時過宮下医師迄、同第九時前帰ル、○第十時頃清七殿来ル、ポンプ具合不旨兼而

先生方御漸有之、売元へ懸合ニ及候所、直シ可遣約束ニ致し置候間、浜（註：横浜のことであろう）迄ポンプ御送り可被下与有之間、其内ニ可差越旨ニ約束致ス、右同人無程帰ル、○十二時過頃安太郎殿来ル、清七殿ニ用事有之旨ニ候へ共、同人帰り候[後]故即刻帰ル、○午後第二時半宮下又医師へ行、帰り道玉松へ立寄、建家遺金之言訳致し、同第五時半頃帰ル、○たか之亭主病氣之旨ニ付、同第五時頃より明朝迄暇相貰度旨願出候ニ付、承知致し遣ス、同人即時行、○午後第十時頃松藏無断ニ而外出シ、夜不帰、

この日、宮下が一日に二度も医者へ行っているのが気になる記述である。

「五月十四日 曇

一、第十時頃吉五郎来ル、同第十一時頃帰ル、○同第九時頃清次郎来ル、兼而註文致し置硝子写之箱拵、残り数二十持参ス、無程帰ル、○午後第四時過宮下金子借用ニ愛宕下迄行、同第九時半頃帰ル、○同第四時過松藏妻おます（註：増）との（註：殿）国元方来着之旨ニ而荷物深川方来ル、同時過おます殿同道ニ而又十殿（註4）御隠居并手代一人・紀の国屋・芸者兩人・箱や（註：屋）一人ニ而来ル、菓子・茶出ス、即時松藏向として竹造根津へ罷越、同道シ帰ル、夫と松藏右人別同道シ川口へ行、大山・[宮下]も行、同第十時過川口方右人数一同車ニ而深川へ帰ル、尤おます殿ハ此方ニ残ル、（註4：「又十殿」は人物名不明であるが、「又十」は屋号と思われる）」

「五月十五日 薄照

一、午後第四時頃人別之義ニ付、宮下扱所迄行、同第六時頃帰ル、○第十時頃てんふらや（註：天婦羅屋）并右衛門妻一同来ル、兼而約束之向家、譲受之金子受取に來ル、別紙證文之通、金三拾五兩遣ス、但拾円ハ去ル九日ニ遣し置候、金子受取主ハ小松卯右衛門[之名前]なり、夫と卯右衛門妻同道ニ而どんどん丸喜へ行、菓子料として金二朱宮下持参ス、右家当方ニ而引受候ニ付、地所も当月方当方ニ而借用之旨相断、即時帰ル、

「五月同十七日 晴

一、第九時過宮下、湯島四丁目扱所へ行、先生之御他出、おます殿寄留、竹造寄留之事御届致ス、下案内書入箱ニ有之、○午後第三時前織田数馬殿（註5）来ル、何敷先生ニ御頼之義有之旨ニ候得共、御帰り之後又可参旨、且本荘ニ住居之宮部（註：「三宅」の間違ひ）氏と言人写真伝習頼度旨、尤通稽古之旨同人方頼有之候故、同塾生も[両三人]有之候間、先生御留主ニも[候へ者]相談致し、御挨拶致すへき旨申候所、いつれ（註：いづれ）今度ハ宮部（註：「三宅」の間違ひ）を遣し可申間、委細之義同人へ被仰聞可被下と有之、無程帰ル、

（註5：織田数馬は、旗本・織田宮内大輔信愛（おだくないだゆうのぶよし）の息子。父と共に上野戦争に参加、後に会津まで行っている。その時の織田数馬の変名は小野田久次郎）

（※「方」は平仮名の「よ」と「り」の合字）

（森重和雄）